

最近の食肉をめぐる状況

（ 2022 年 10 月報告 ）

【 項 目 】

- I 牛豚部分肉価格の動向
- II 食肉関連販売先の販売動向
- III 牛豚肉需要の動向
- IV 牛豚肉輸入の動向
- V 牛肉輸出の動向

公益財団法人 日本食肉流通センター

2022 年 10 月 18 日

最近の食肉をめぐる状況（2022 年 10 月報告）

公益財団法人 日本食肉流通センター

当センターでは、新型コロナウイルス感染症の拡大が国内の食肉業界にどう影響してきているかを分析し、過去 5 回にわたってホームページで報告してきました。

直近では、輸入関連品目やエネルギーが、ロシアによるウクライナ侵攻や急速な円安等の影響により価格が上昇し、食肉を含む食料品についても価格や販売の動向に大きな影響が出ています。

また、コロナは、本年 3 月 21 日をもってまん延防止等重点措置が終了し落ち着きをみせるかと思われましたが、7 月ごろから第 7 波がそれまでにない大規模な感染拡大をし、経済活動に暗い影を落としています。

今回は、コロナによる影響に、国際問題や為替など食肉販売に大きな影響を与えている要因を加えて分析し、最近の食肉販売をめぐる状況を報告します。なお、分析に用いたデータは、コロナの行動制限が解除される前のものが中心となっています。

I 牛豚部分肉価格の動向

当センターが公表している部分肉価格は、国内において食肉卸売業者が卸小売業者や外食事業者等の需要者へ販売する価格ですが、最近では、その価格も大きく動いてきています。

ここでは、部分肉のロイン、ヒレ、バラという 3 つの主要な部位に着目し、それらの価

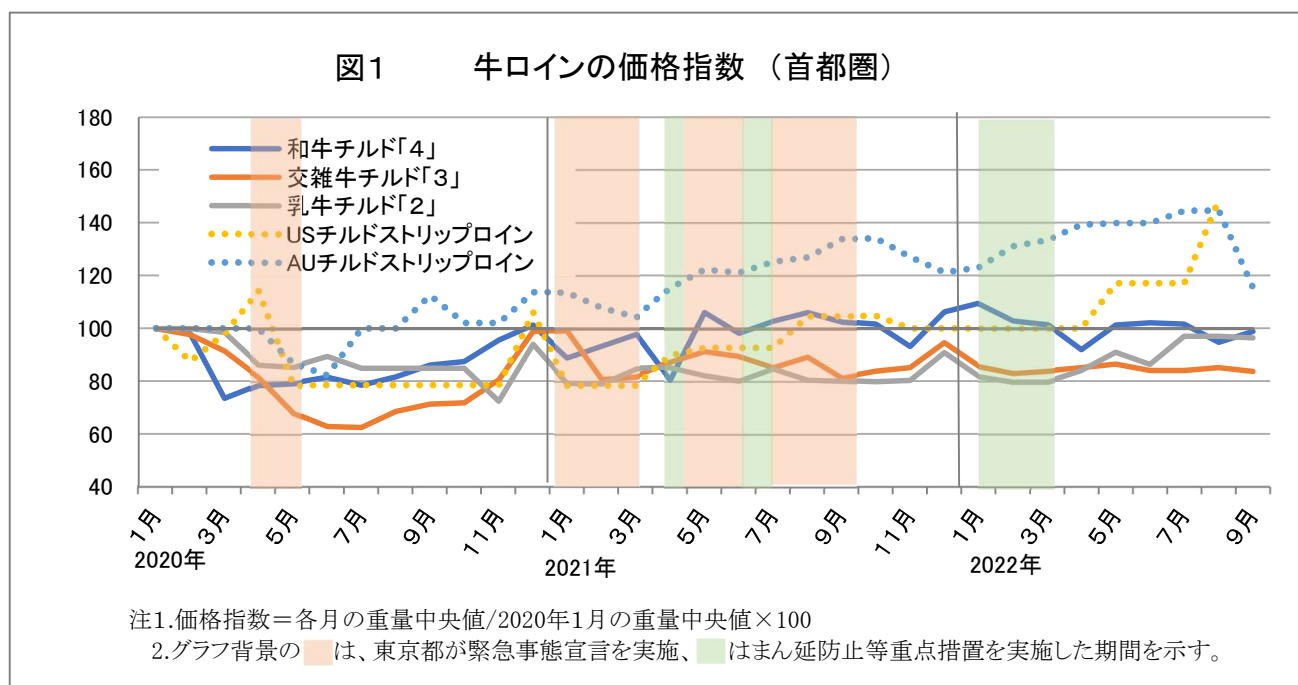
格について種類・畜種別の比較をしやすいように指数化して動向を追いました。価格データは、月ごとに取りまとめている首都圏の部分肉価格（消費税込み）のうち重量中央値を用い、コロナの影響が現れていない 2020 年 1 月の価格を基準（100）とした指数（以下「価格指数」という。）として、その動向をみました。

1 牛部分肉の部位別価格の動向

国産では和牛チルド「4」、交雑牛チルド「3」、乳牛チルド「2」、輸入は米国産チルド及び豪州産チルドの双方またはいずれかについてみていきます。なお、国産牛肉の「」内の数字は肉質等級を表しています。

（1）ロイン

国産ロインの価格指数は、2020 年にコロナの影響によってどの畜種も低下しました。その後、翌 2021 年になると和牛ロインの価格指数は緩やかに回復しコロナ以前の水準となりますが、交雑牛と乳牛には明確な回復はみられませんでした。なお、乳牛ロインの価格指数は、急速な円安が始まった 2022 年 3 月から輸入牛肉の動きと同様に上昇しています（図 1）。



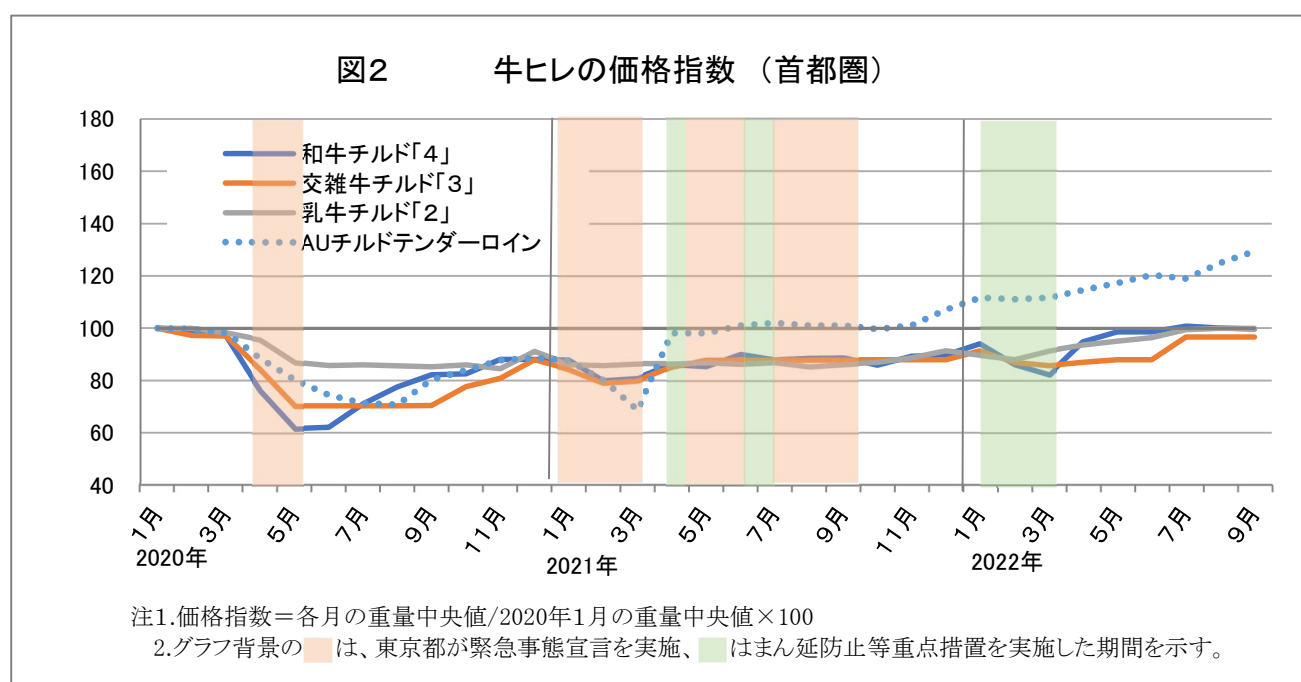
米国産ロイン（ストリップロイン）の価格指数は、国産と同様に 2020 年には低下しましたが、2021 年後半にはコロナ以前の水準に戻っています。その後、2022 年 3 月か

らの急速な円安を反映して同年5月から大幅な上昇となっています。

豪州産ロイン（ストリップロイン）の価格指数は、2021年に入ると、現地価格の上昇により上昇が始まり、後半には落ち着きをみせます。2022年になると再度上昇しますが、9月には低下しています。

（2）ヒレ

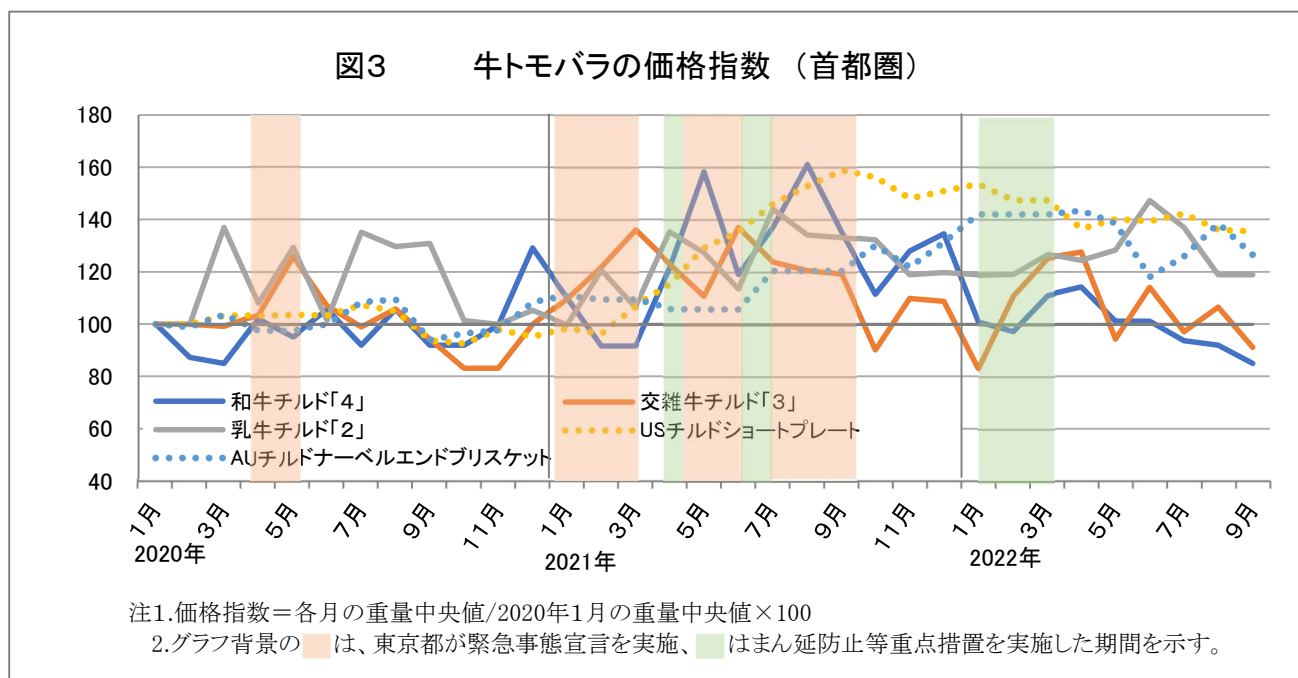
国産ヒレの価格指数は、コロナの影響によりホテル等の需要が大きく減少したことから低下し、回復しないまま推移してきました。しかし、2022年3月下旬にコロナの行動制限が解除されたことからヒレの需要が回復に向かい、食肉事業者からは、注文に供給が間に合わず不足気味であるとの声まで聞かれるようになりました。これに合わせて、各畜種の価格指数も上昇傾向となりました（図2）。



豪州産ヒレ（テンダーロイン）の価格指数も、コロナの影響で低下していましたが、現地価格の上昇などの要因から2021年4月にはコロナ以前の水準までに回復し、同年の年末からはさらに上昇します。2022年になると3月からの円安でさらに上昇し、9月には130となりました。

(3) トモバラ

国産トモバラは、焼き材等として家庭内外での需要が根強く、その価格指数は、コロナの影響下でも低下はみられませんでした。2021年に入ると、輸入トモバラの卸業者仕入価格が大きく上昇したことに伴って、上昇傾向で推移します。同年後半になって米国産トモバラの仕入価格が、反動により大きな低下傾向に転じると、国産トモバラの価格指数も低下傾向となります（図3）。



米国産トモバラ（ショートプレート）の価格指数は、2021年には仕入価格の上昇に伴って上昇しましたが、その後の仕入価格が低下したため2021年9月に低下傾向に転じます。

2022年に入ると米国産トモバラの価格指数は引き続き低下しますが、3月からの急速な円安の値上げ効果から下げ止まっています。

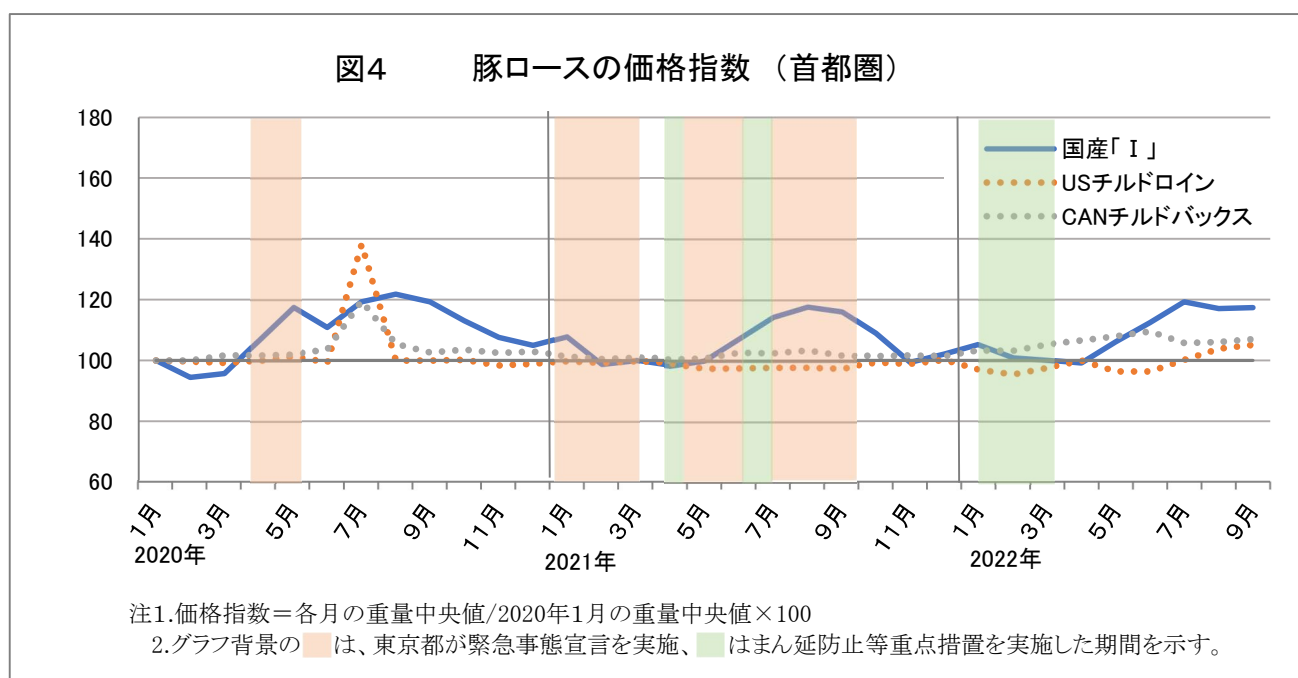
このように直近では落ち着きをみせてきた輸入トモバラですが、2022年9月の価格指数は、基準である2020年1月時点からみれば、米国産で136、豪州産で127と高い価格水準となっています。

2 豚部分肉の部位別価格の動向

国産では国産豚肉チルド「I」、輸入は北米産のチルド豚肉についてみていきます。「I」は、格付が「極上」及び「上」の枝肉から生産された部分肉であることを表します。

(1) ロース

国産ロースの価格指数は、コロナの影響の中で巣ごもり需要が旺盛になったなどから堅調であり、夏場の需要期には上昇して推移しました（図4）。

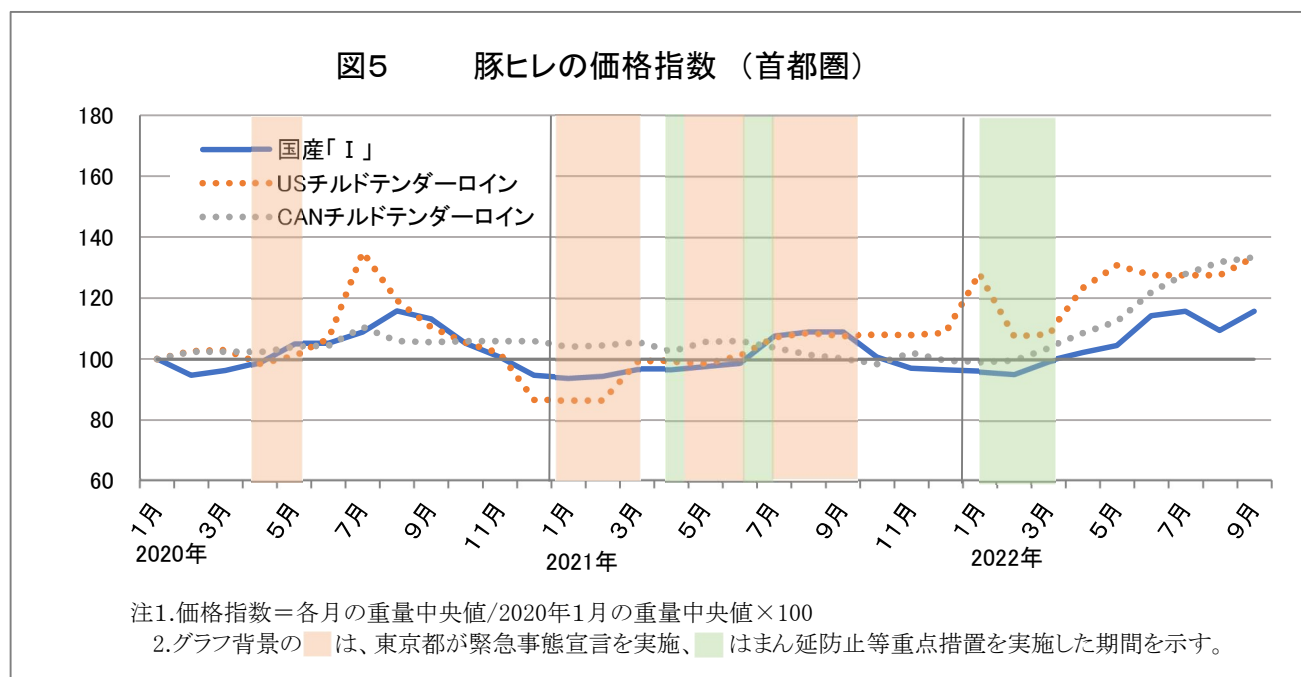


輸入ロース（ロイン又はバックス）の価格指数は、2020年夏には米国でのコロナ影響による食肉工場の稼働率低下などにより供給が滞って一時的に跳ね上がりましたが、その後は比較的安定して推移してきました。

(2) ヒレ

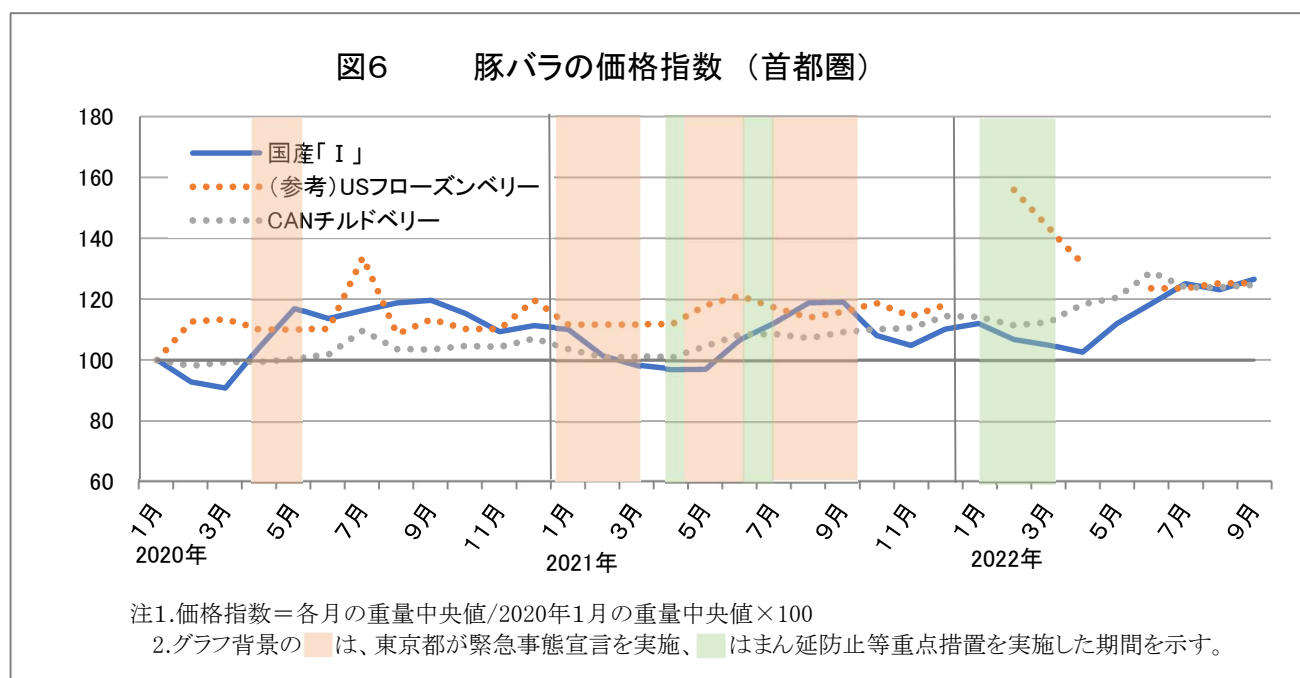
国産ヒレの価格指数は、2020年半ばから低下してきましたが、2022年に入ると需要回復傾向により上昇に転じ、2022年3月以降は輸入豚肉と同様にさらに上昇します（図5）。

輸入ヒレ（テンダーロイン）の価格指数は、2022年に入ると上昇傾向となり、急速な円安が始まった3月以降、さらにその傾向は顕著になります。



(3) バラ

国産バラの価格指数は、輸入豚肉との価格差が縮まり引き合いが強い状態が続き、2021年半ばから上昇傾向で推移しました。その後、価格指数はやや落ち着きましたが、2022年に入ると、5月から輸入バラ価格の上昇もあって上昇し、9月には127とかなり高い状況となっています（図6）。



輸入バラ（ベリー）も 2021 年から価格指数は上昇傾向で推移し、急速な円安が始まる 2022 年 3 月からさらにその傾向は顕著となります。

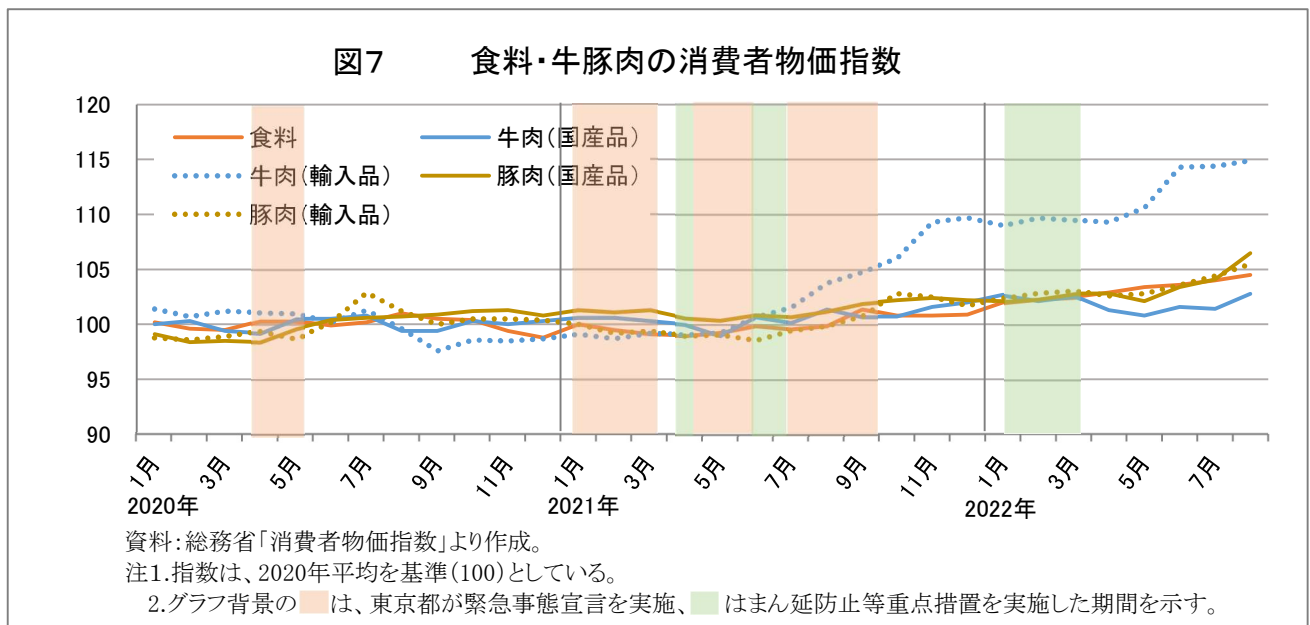
Ⅱ 食肉関連販売先の販売動向

1 小売の販売動向

（1）小売価格

2022 年になると多くの食料品での値上げが報道されるようになりますが、国際相場をみると、穀物、植物油脂、乳製品などの基本食料に加え、全てのモノの価格に影響する原油の相場が、前年の 2021 年 6 月ごろから上昇が顕著になってきました。

食料の小売価格の動向について、総務省の消費者物価指数（2020 年平均が基準値。以下「物価指数」という。）をみると、国際相場の動きに連動するように食料の物価指数は 2021 年 6 月ごろから上昇し始めています（図 7）。



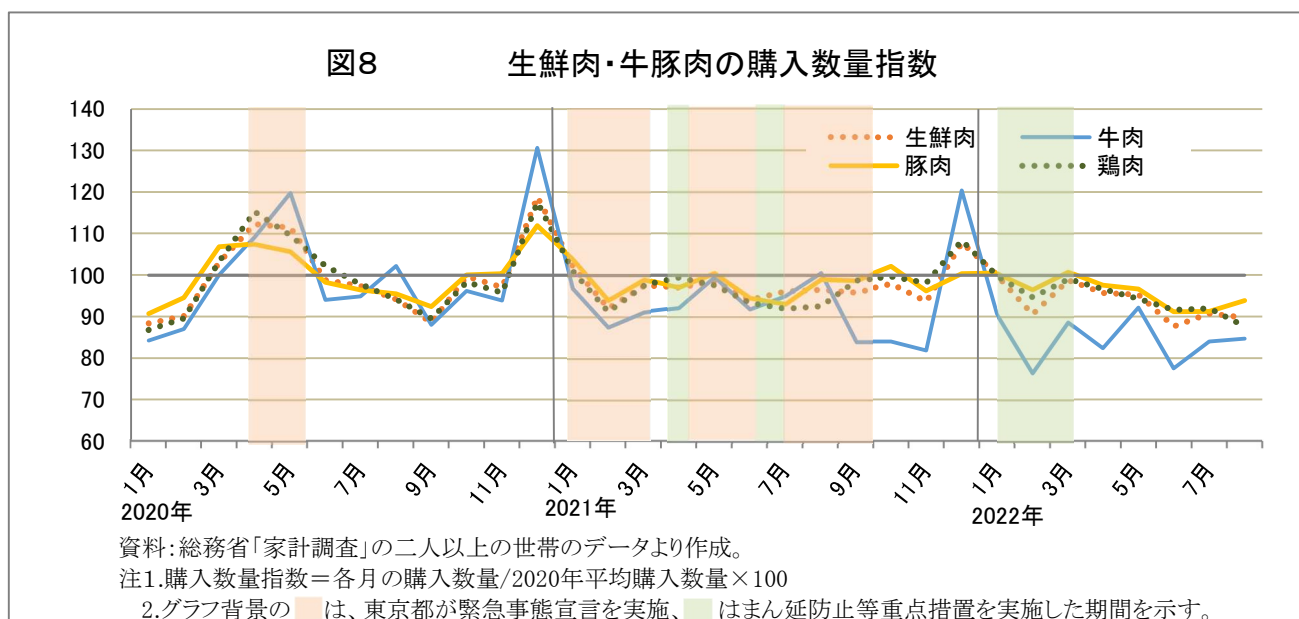
食肉の物価指数も、食肉の種類を問わず食料と同様に 2021 年 6 月ごろから上昇傾向となりますが、特に輸入牛肉の物価指数は、2021 年にコロナから回復した中国の米国

等の牛肉に対する需要が増加したことから他の食肉より大きく上昇し、2022年8月時点で115となっています。

2022年3月に急速な円安が始まると、国産も含め、どの種類の食肉の物価指数も上昇が加速する動きとなっています。

(2) 1世帯当たり食肉購入数量

小売価格の上昇は、家庭の食肉購入量に大きな影響を及ぼします。総務省家計調査の月ごとの家庭（二人以上の世帯）での食肉購入数量について、2020年平均を基準（100）とした指数（以下「購入数量指数」という。）として、その動向をみました（図8）。



牛肉の購入数量指数は、季節的な変動があるものの、輸入牛肉の物価指数が上がり始めた2021年半ば以降、低下傾向が顕著になりました。2022年1～8月の指数平均は84.6と前年同期から8.8ポイントも低下し、家庭の牛肉購入数量は大きく減少しています。

豚肉及び鶏肉の購入数量指数は、2022年4月以降、100を下回り低下傾向で推移しています。この結果、生鮮肉全体の2022年1～8月の平均指数は93.6と前年同期から3.2ポイント低下しています。

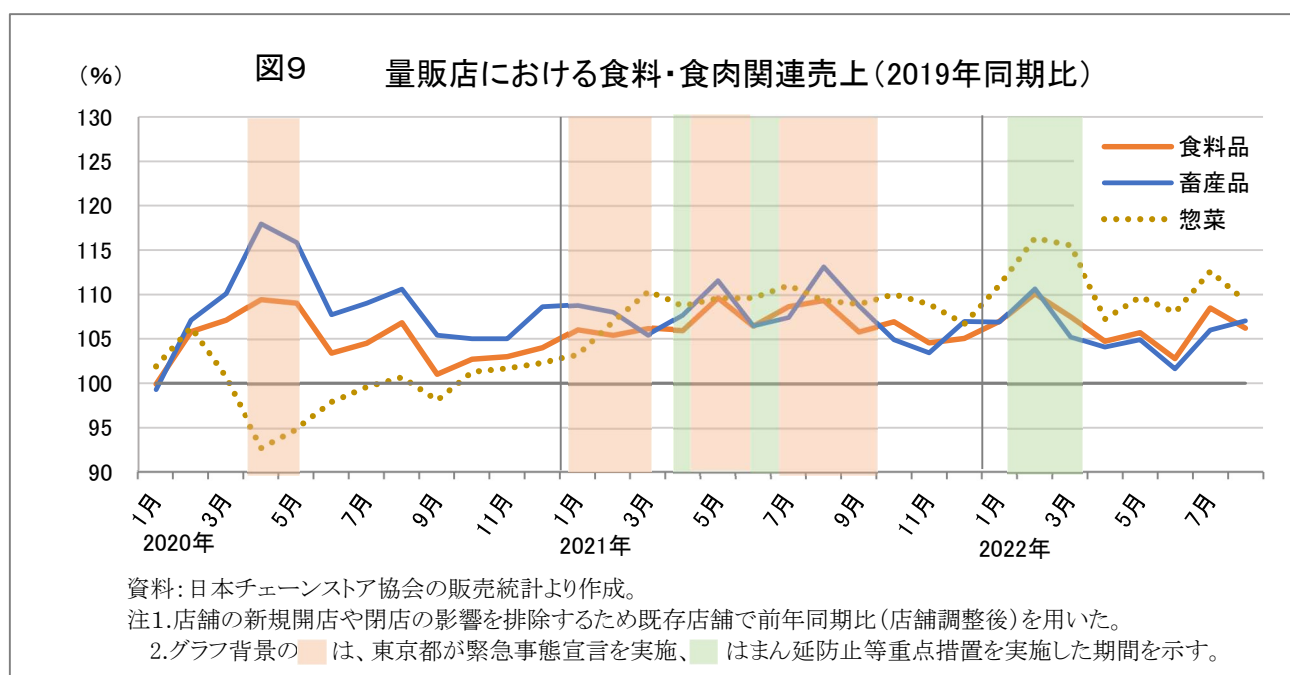
(3) 量販店における売上

量販店での食料品、畜産品及び惣菜の売上について、日本チェーンストア協会の販売統計を用いて2019年比を計算して動向をみてみます(図9)。

畜産品の売上は、2020年にはコロナの影響によって内食需要が拡大し、特に畜産品は食料品全体を大きく上回って推移しました。翌2021年は、2019年比103~113で推移しましたが、食料品の比との差は小さくなります。

2022年に入ると、畜産品の売上は、まん延防止等重点措置期間中は食料品全体と同じように一時的に増えましたが、その後は食肉も含めた食品の値上げが続き、畜産品及び食料の売上は、落ち着いていくようになります。

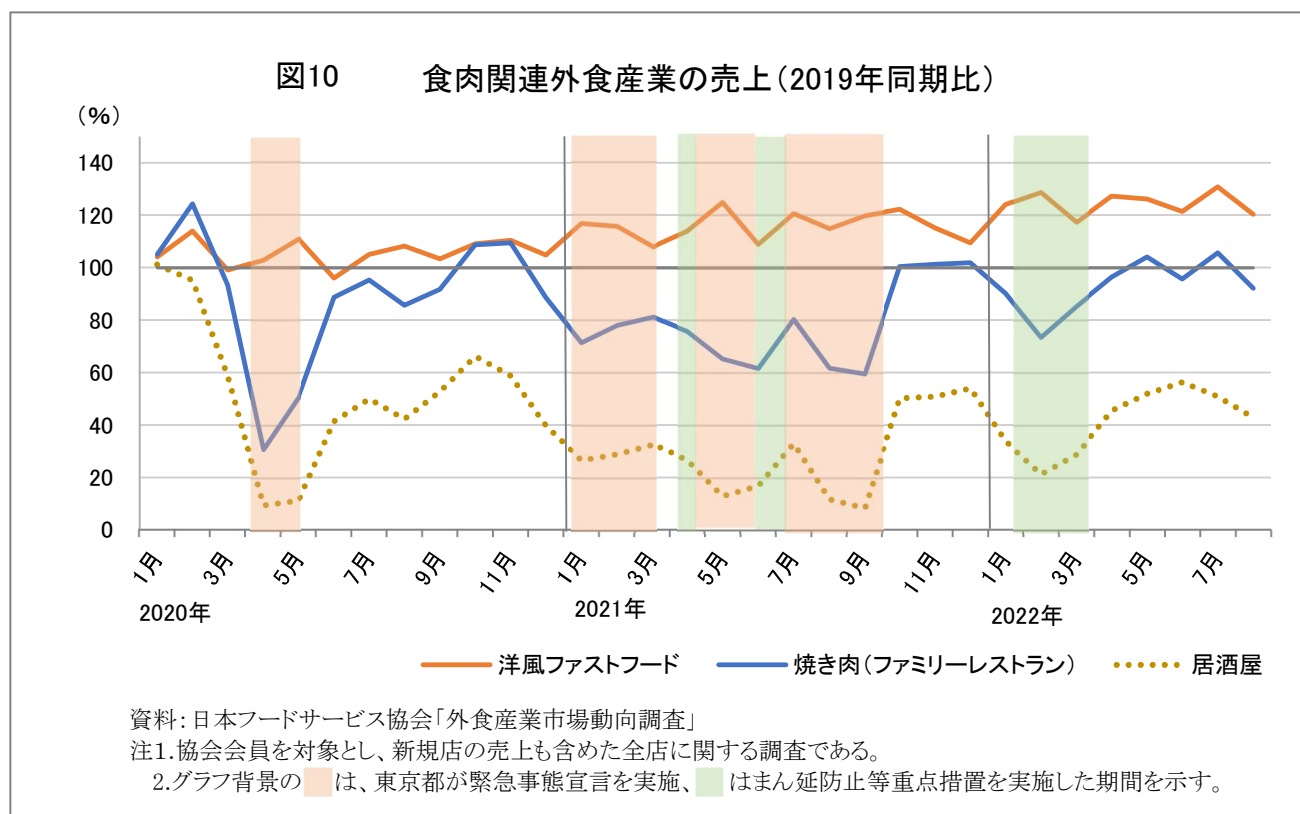
量販店での惣菜は、食肉が多く利用される品目です。その売上は、2020年にはコロナへの対応として個包装販売に売り方を変更したことから一時売上が減少しましたが、後半から内食需要の増加に伴って増加傾向に転じます。2022年に入ると、まん延防止等重点措置期間に大きく伸び、その後も手間がかからないこともあって食料品と比べ好調に推移しています。



2 業務用食肉の販売動向

食肉事業者の主な販売先のうち、外食の「焼き肉」、「居酒屋」、「洋風ファストフード」の売上（全国）について、日本フードサービス協会の外食産業市場動向調査の2019年比を用いて月ごとの動きをみました（図10）。

「焼き肉（ファミリーレストラン）」及び「居酒屋」の売上は、コロナの発生とコロナに対する措置により大きな影響を受けてきました。2022年にも、東京都をはじめとする18都府県でまん延防止等重点措置を実施した1月後半から3月にかけて、両者の売上は大きく減少しました。



まん延防止等重点措置が2022年3月21日をもって終了した後、両者の売上は回復に転じ、5月には、「焼き肉（ファミリーレストラン）」は店舗数も戻って協会会員全店の売上2019年比で100%を超え、その後もコロナ以前の水準近くで推移しています。

一方、「居酒屋」は店舗数が戻らず、全店売上は50%にとどまっており、厳しい状況から抜け出せていません。

また、「洋風ファストフード」はテイクアウトでの提供が好調で、店舗数はわずかに減少しているものの、全店売上は2022年以降も順調に増加傾向で推移しています。

Ⅲ 牛豚肉需要の動向

1 牛肉需要（推定出回り量）の動向

牛肉の国内需要量を表す推定出回り量は、コロナ発生前は増加傾向で推移していましたが、コロナの影響が出る2020年以降、前年を下回る状況が続いています。外食需要が大きく落ち込んだことや輸入牛肉の現地価格の上昇などが大きな要因となっています（表1）。

2022年に入っても8月までの牛肉の需要量は前年同期比97.1%であり、依然、コロナの影響から回復したという状況にはなっていません。

表1 牛肉の推定出回り量

単位:トン

	2020年	2021年	2022年（1～8月）
	推定出回り量（前年比）	推定出回り量（前年比）	推定出回り量（前年同期比）
牛肉全体	923,980（98.1%）	901,760（97.6%）	571,987（97.1%）
うち国産品	329,776（102.2%）	325,212（98.6%）	215,731（104.0%）
うち輸入品	594,205（96.0%）	576,548（97.0%）	356,255（93.3%）

資料：農畜産業振興機構「牛肉需給表」より作成。

国産牛肉の需要量についてみると、2022年1～8月は、輸入牛肉の現地価格高に加え円安などにより輸入牛肉との価格差が縮小していることから、牛肉需要が輸入から国産へシフトする動きもあり、前年同期比104.0%と増加しました。

輸入牛肉の需要量は、逆に前年同期比93.3%と前年を下回る状況となっています。

2 豚肉需要量（推定出回り量）の動向

豚肉の需要量は、コロナの影響により内食需要が伸び、2020年から堅調に推移しましたが、2022年には落ち着き前年と同じ水準となっています（表2）。

表2 豚肉の推定出回り量

単位:トン

	2020年	2021年	2022年（1～8月）
	推定出回り量（前年比）	推定出回り量	推定出回り量（前年同期比）
豚肉全体	1,817,830（100.4%）	1,843,478（101.4%）	1,206,805（100.4%）
うち国産品	913,165（102.3%）	918,645（100.6%）	597,899（99.2%）
うち輸入品	904,665（98.6%）	924,833（102.2%）	608,906（101.5%）

資料:農畜産業振興機構「豚肉需給表」より作成。

国産豚肉の需要量は、肉食需要が旺盛になったことに加え輸入豚肉の調達が滞ったための代替需要もあり、2020年と2021年は前年を上回って推移しました。しかし、2022年に入ると8月までの需要量は、それまでの旺盛な需要も落ち着き、かつ、飼料高など生産面の制約もあり前年同期比99.2%と前年同期をわずかに下回りました。

輸入豚肉の需要量は、2021年には、外食需要の減少や米国の食肉工場稼働の低下などがあつた前年から増加傾向に転じ、2022年に入ると8月までの需要量は、現地価格の上昇や入船遅れなどの影響が続くものの、前年同期比101.5%と前年同期をわずかに上回る水準となっています。

IV 牛豚肉輸入の動向

1 牛肉輸入の動向

(1) 輸入数量

牛肉の輸入数量は、コロナ以前には増加で推移していたものが、コロナの影響による外食等の需要の減少を反映して2020年から減少に転じ、2022年に入っても8月までの輸入数量は前年同期比98.0%と減少傾向は続いています（表3）。

この間、牛肉輸入については、牛肉調達の停滞や食肉工場の稼働率低下、現地価格の高騰など輸入環境の悪化につながる要因が多くありましたが、2022年に入ると、これらに加えて3月からの急速な円安による値上げの影響が環境悪化に拍車をかける状

況となりました。

2022 年 1 ～ 8 月までの冷蔵・冷凍別の輸入量は、それぞれ前年同期比 83.9%、110.1%と冷蔵が大きく減少する状況となっています。

表3 牛肉の輸入数量

単位:トン

	2020年	2021年	2022年(1～8月)
	輸入数量 (前年比)	輸入数量(前年比)	輸入数量(前年同期比)
牛肉全体	600,326 (97.5%)	584,519 (97.4%)	382,521 (98.0%)
うち生鮮・冷蔵	261,309 (95.2%)	263,648 (100.9%)	152,417 (83.9%)
うち冷凍	338,636 (99.5%)	320,621 (94.7%)	229,858 (110.1%)

資料: 農畜産業振興機構「牛肉の輸入動向」より作成。

注: 部分肉ベースである。

(2) 輸入価格

牛肉は、コロナ発生後に現地価格高となり、その後、一部は落ち着きをみせたものの、2022 年 3 月からは円安でさらに調達価格は引き上げられます。財務省貿易統計を用いて主要部位の平均輸入価格 (円/kg) をみると、2021 年は前年に比べ 12～29%の上昇、2022 年 1 ～ 8 月にはさらに前年比 24～54%の上昇となっています (表 4)。

表4 牛肉の部位別輸入価格

単位:円/kg

	2020年	2021年	2022年(1～8月)
	輸入価格 (前年比)	輸入価格 (前年比)	輸入価格(前年同期比)
生鮮・冷蔵			
うちロイン	1,377 (90.8%)	1,573 (114.2%)	1,894 (124.0%)
うちかた・うで・もも	801 (101.3%)	924 (115.3%)	1,094 (124.1%)
うちばら	626 (98.0%)	758 (121.0%)	895 (125.3%)
冷凍			
うちロイン	642 (93.3%)	800 (124.6%)	1,047 (136.6%)
うちかた・うで・もも	595 (100.9%)	665 (111.7%)	855 (133.7%)
うちばら	380 (92.0%)	491 (129.3%)	681 (154.3%)

資料: 財務省「貿易統計」より作成。

直近の食肉事業者からの聴き取りでは、この調達価格の上昇に対し、「新たな輸入先国を検討している。」との声や「代替として国産の乳用種の引き合いが強くなっている。」との声がありました。

2 豚肉輸入の動向

豚肉の輸入数量については、2020 年には、コロナの影響で内食需要が旺盛となり冷蔵

が増加しましたが、外食や加工品向け需要が多い冷凍は大きく減少し、結果、輸入数量全体は前年比 93.0%と減少しました（表 5）。

2021 年の輸入数量は前年をやや上回りますが、2022 年入ると 8 月までの輸入数量は、冷蔵が減少する一方、冷凍が大きく増加したため、輸入数量全体は大きく増加しています。

表5 豚肉の輸入数量

単位：トン

	2020年	2021年	2022年(1～8月)
	輸入数量 (前年比)	輸入数量 (前年比)	輸入数量 (前年同期比)
豚肉全体	891,093 (93.0%)	902,612 (101.3%)	671,196 (112.3%)
うち冷蔵	415,992 (102.2%)	419,989 (101.0%)	277,050 (96.8%)
うち冷凍	475,061 (86.2%)	482,608 (101.6%)	394,119 (126.6%)

資料：農畜産業振興機構「豚肉の輸入動向」より作成。

注：部分肉ベースである。

直近の食肉事業者からの聴き取りでは、海外の状況について「輸入豚肉が、現地の荷受作業者の不足等により安定して入ってこない。」との声や「豚肉の新たな輸入相手国を探している。」という声がありました。

輸出先国についてみると、この間、日本にとって主要な輸入相手国である米国からの輸入が伸び悩む中で、冷蔵ではメキシコ、冷凍ではスペインからの輸入量が増加しています。

V 牛肉輸出の動向

牛肉の輸出は大きく増加してきており、このことは、国内の和牛肉需給に大きな影響力を持つようになっていきます。食肉事業者からは、牛肉輸出は、特に和牛ロインの需給バランスに調整機能を果たしていると指摘されています。ここではロイン系（ヒレを含む。以下「ロイン」という。）に着目して輸出の状況をみていきます。

1 牛肉輸出の動向

牛肉の輸出は、コロナの影響が出始める 2020 年から翌 2021 年にかけて米国やカンボジア向けを中心に大きく伸ばしてきましたが、2022 年に入ると 8 月までの輸出数量は、カンボジア向けが激減し、輸出数量全体は前年同期比 91.7%と大きく減少しました（表 6）。

ロインの輸出については、2021 年には前年比 175.6%と大きく伸びましたが、2022 年 1～8 月には前年同期比 86.8%と大きく減少し、ロイン以外よりも大きな減少となっています。

表6 牛肉の輸出数量

単位:トン

	2020年	2021年	2022年(1～8月)
	輸出数量 (前年比)	輸出数量(前年比)	輸出数量(前年同期比)
牛肉全体	4,844 (111.6%)	7,877 (162.6%)	4,355 (91.7%)
うちロイン	2,590 (97.2%)	4,547 (175.6%)	2,438 (86.8%)
うちロイン以外	2,254 (97.2%)	3,330 (147.7%)	1,917 (98.9%)

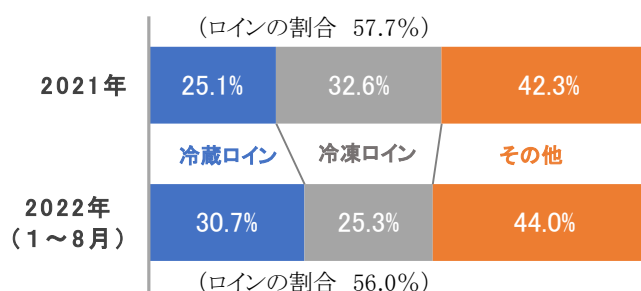
資料: 財務省「貿易統計」より作成。

注: 部分肉ベースである。

この結果、牛肉輸出数量に占めるロイン割合は、2021 年の 57.7%から 2022 年 1～8 月は 56.0%と低下しましたが、それでも 1 頭に占めるロインの重量構成割合が 14%程度であることを考えると、輸出部位はロインに傾斜している状況に変化はありません（図 11）。

輸出されるロインの冷蔵と冷凍の比率は、2021 年はおおむね 4：6 でしたが、2022 年 1 月～8 月には逆転し、おおむね 6：4 と冷蔵が多くなっています。

図11 牛肉輸出数量の構成割合



2 ロイン輸出における冷蔵と冷凍の比較

(1) 冷蔵ロイン

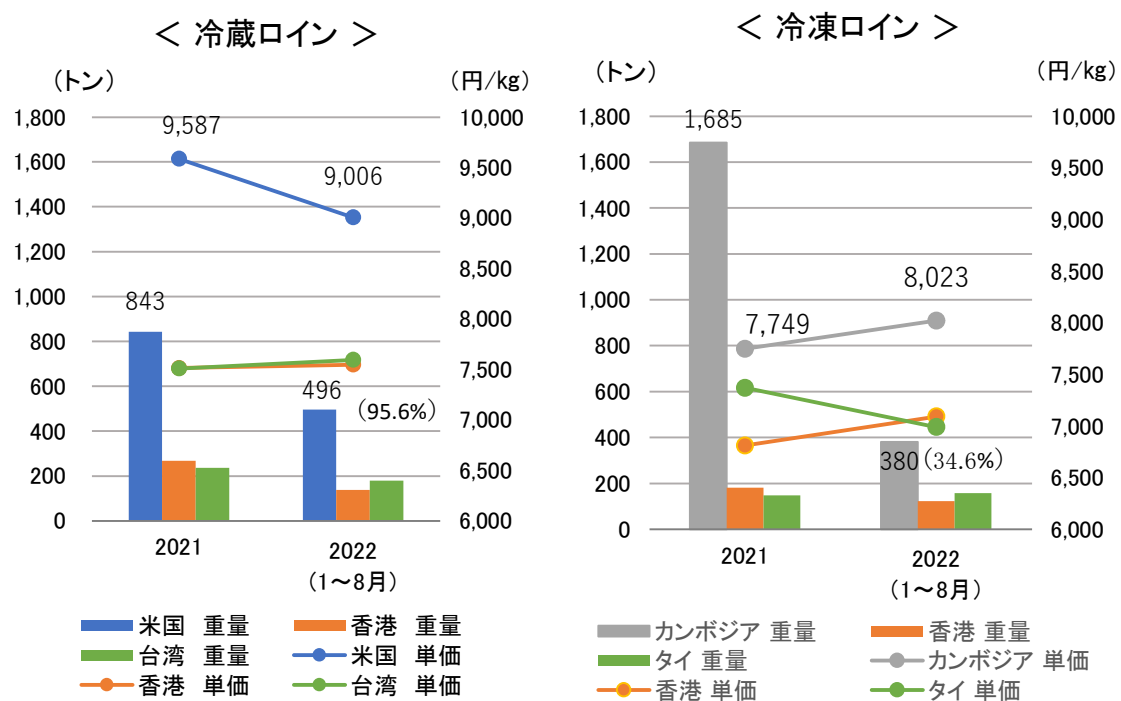
冷蔵ロインについては、2021 年において米国、香港及び台湾が輸出先上位 3 か国となっており、この 3 か国向け数量は全体の 68%を占めます。2022 年 1～8 月は同じ上位 3 か国で 61%とシェアはやや低下しています（図 12）。

1 位の米国向け数量は、2021 年において冷蔵ロイン全体の 43%を占めていましたが、2022 年 1～8 月には 37%とシェアは低下しています。

米国向け数量の伸びは、2021 年は前年の 2.8 倍以上と大きなものでしたが、2022 年 1～8 月は前年同期をやや下回る水準となっています。

なお、2022 年 1～8 月の米国向け取引単価は、3 月からの急激な円安により為替面で輸出環境は改善している面があるものの、米国の低関税枠の超過による関税引上げなどもあり、低下しています。

図 12 ロインの輸出重量と取引単価（2021 年輸出上位 3 か国）



資料:財務省「貿易統計」より算出。

注:()内の数値は前年同期比を示す。

(2) 冷凍ロイン

冷凍ロインについては、2021 年においてカンボジア、香港及びタイが輸出先上位 3 か国となっており、この 3 か国向け数量は全体の 79%を占めました。2022 年 1 ～ 8 月は同じ上位 3 か国で 60%とシェアは大きく低下します。

1 位のカンボジア向け数量は、2021 年において冷凍ロイン全体の 66%と過半を占めていましたが、2022 年 1 ～ 8 月には前年同期に比べ約 7 割減少し、1 位に変わりはないものの、シェアは 35%とかなりの低下となっています。

輸出される牛肉の取引単価についてみると、アジア向けの取引単価は、米国向け（冷蔵）の 8 割程度と低い水準となっており、食肉事業者から「アジア向けの牛肉輸出は、価格が安く利益の確保がむずかしい。」との報告がありますが、その実態を裏付ける数値となっています。

なお、アジア向けの中での取引単価では、カンボジア向け（冷凍）が香港向け及びタイ向けの冷凍・冷蔵よりかなり高いものとなっています。

(以上)

(問合せ先)

公益財団法人日本食肉流通センター

情報部 審査役 安藤

Tel : 044-266-1172